

説話の平行コーパスの設計

—平安・鎌倉時代の文体変異の研究に向けて—

田中 牧郎 (国立国語研究所言語資源研究系) †

Design of a Parallel Corpus of *Setsuwa* Literature:

Toward Studies of Stylistic Variation of Heian and Kamakura Japanese

TANAKA Makiro (National Institute for Japanese Language and Linguistics)

1. 日本語史における文体的変異

言語史をとらえるためのコーパスの設計においては、言語の時間的変異に加えて社会的変異をどのように反映させるかを研究することも求められる。日本語史上重要な社会的変異には、地域、階層などによる変異も考えられるが、文献資料によって最も明確に跡づけることができるのは文体による変異である。特に、現代日本語の書き言葉の源流となった和漢混淆文が確立する鎌倉時代までのそれを正しく把握することは、極めて重要なことである。図1は、鎌倉時代までの文体的変異の概略を示したものである。

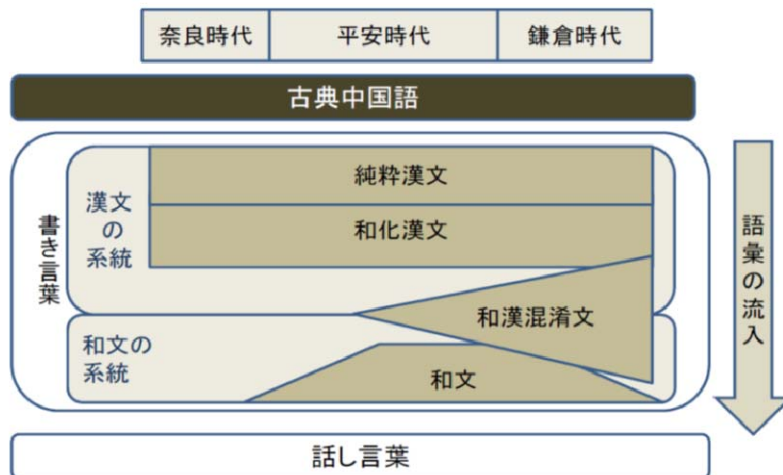


図1 日本語（鎌倉時代まで）の文体的変異

古い時代の話し言葉そのものは資料がない。書き言葉のうち、和文、和漢混淆文、和化漢文、純粹漢文を、それぞれバランスを考慮しながらコーパス化していくことが求められる。一方で、言語史研究は、書き言葉そのものよりも話し言葉の歴史に関心を寄せることの方が多いため、まずは、話し言葉に近い書き言葉である、和文の系統を優先させることは現実的な方策であろう。また、漢文の系統の書き言葉には、古典中国語の要素も濃いため、日本語史資料としては扱いにくい面も強くある。このような背景から、国立国語研究所の「通時コーパス」(歴史コーパス)の開発においても、まずは、和文の系統のテキ

† mtanaka@ninjal.ac.jp

ストからコーパス化に着手し、順次、漢文の系統のテキストに手を広げていくことを考えている。

ところで、上記のような文体的変異をとらえることのできるコーパスを設計するには、それぞれの文体のテキストを個別に選定してコーパス化するだけでなく、文体的変異が分析しやすいように、テキスト相互を関連付ける工夫をすることも望まれよう。そのような工夫の一つとして、本稿では、同一内容が異なる文体で書かれたテキストに着目し、そのパラレルコーパスを設計することについて検討を加えたい。

2. 同文説話

日本語史の資料となるテキストにおいて、同一内容が異なる文体で書かれたものは多く存在するが、特に、古典文学のジャンルの一つである「説話」は、そのようなケースが多い一群として注目される。説話は伝承を書き記した文学であるが、説話集に収録されることで後世に伝わる。その説話集には、様々な文体で書かれたものがあり、その結果、同一の説話（同話）が異なる文体で記録されることも多い。特に、平安時代から鎌倉時代の説話集に収録された説話は、文体的変異をとらえるのに好適なものが種々現存している。

日本の伝承は、仮名成立以前は純粹漢文や和化漢文で書かれ、仮名が成立した後は和文で書かれものも現れるが、その書かれた説話は説話集の文体に応じて種々の文体として実現する。一方、中国から漢文で書かれた説話が書物を通して日本に伝えられ、純粹漢文として受容されることがあるが、それが日本で訓読されたり、訓読の域を脱して和化漢文や和漢混淆文に翻訳されたりして、説話集に収録される場合もある。このような、異なる説話集に収録される同内容の説話は、「共通説話」と呼ばれる。共通説話のなかには、内容は同じでも、その表現が大きく異なり、文どうしの対応がとれないものも多い。一方、共通説話の中には、表現の共通性が高く、文レベル、語レベルで対応を取ることが可能な「同文説話」も多い。この同文説話をパラレルコーパスにすれば、文体的変異をとらえるのに好適なデータベースとなるだろう。

文体的変異の大きい同文説話を数多く収録しているのが、和漢混淆文である『今昔物語集』（平安時代末期、12世紀前半成立）とその周辺の説話集である。『今昔物語集』との同文説話を多くおさめる説話集には様々なものがあるが、小峯（1997）などを参考に、『今昔物語集』との同文説話の話数を集計して掲げると次の通りである。

漢文系統の説話集

純粹漢文：三宝感応要略録（63話）、冥報記（49話）、法苑珠林（14話）など

和化漢文：法華験記（96話）、日本靈異記（74話）、日本往生極楽記（32話）など

和文系統の説話集

宇治拾遺物語（61話）、古本説話集（28話）、俊頼髓脳（8話）など

同文とする認定にはゆれも多いので、上記の話数は目安にとどまるが、漢文系統（純粹漢文・和化漢文）の説話集にも、和文系統の説話集にも、『今昔物語集』との同文説話が多いことが見てとれる。『今昔物語集』と上記の説話集との同文説話を使って平安時代末期の文体的変異を明らかにしようという研究は、佐藤（1984）、山口（1984）、藤井（2003）、今野（2009）、船城（2011）など、日本語学の分野に多くの蓄積がある。しかし、例えば和漢混淆文である『今昔物語集』が、和文と和化漢文のどちらにより近いのかということについての研究者の見解は一致していないなど、この時期の文体的変異の全体像は実はよく分かっていない。『今昔物語集』とその周辺の説話集の同文説話のパラレルコーパスを作るこ

とは、このような議論を実り多いものにすることができると思われる。それは同時に、和漢の両系統を統合するような通時コーパスの作成のための重要な一段階にもなるだろう。

3. 和文説話集と『今昔物語集』の同文説話のパラレルコーパス

3.1 和文説話集と『今昔物語集』のテキスト

和文説話集のうち、『古本説話集』（平安時代末期、12世紀前半）及び『宇治拾遺物語』（鎌倉時代前期、13世紀前半）と、『今昔物語集』の同文説話は、直接的な継承関係によって生じたものではなく、散逸した『宇治大納言物語』（平安時代後期、11世紀中ごろ）に収録する説話を、それぞれが採ったことによって生じたものである。先行研究によれば、『宇治大納言物語』の説話を採録する際に、『古本説話集』『宇治拾遺物語』はその表現にあまり手を加えず、『今昔物語集』は手を加えることも多かったとされている。

同文説話の一例として、『宇治拾遺物語』第121話と、『今昔物語集』巻4-9の冒頭部分を示してみよう。¹

宇治拾遺物語 121

昔、天竺に一寺あり。住僧もつとも多し。達磨和尚この寺に入りて、僧どもの行ひを窺ひ見給ふに、ある坊には念仏し、経を読み、さまざまに行ふ。ある坊を見給に、八九十ばかりなる老僧の、ただ二人みて圍碁を打つ。

今昔物語集 巻4-9

今昔、天竺に、陀楼摩和尚と申す聖人在ます。此の人、五天竺に不行至ぬ所無く行て、諸の比丘の所行を善く見て世に傳へ給ふ人也。一の寺有り、其の寺に入て比丘の有様共を伺ひ見る、寺に比久共多く住む。或る房には佛に花香を奉り或る房には經典を讀誦する比丘有り、様々に貴く行ふ事無限し。但し其の中に一の房有り、人住たる氣色無し、草深塵積れり。深く入て見れば、八十許なる老比久二人居て碁を打つ。

3.2 文と語の対照

上記の二つのテキストをそれぞれ文に区切り、文単位で対照すると、表1のようになる。『宇治拾遺物語』の4文が、『今昔物語集』の7文に対応しており、1対1に対応している文はなく、複数の文が入り組んで対応している様子が見えている。

二つのテキストの対照は、語レベルにまで降りていって対応付けることも可能であり、表2と表3は、『宇治拾遺物語』の第一文と、『今昔物語集』の第一文について、それぞれ対照した作業の結果を示したものである。『宇治拾遺物語』から『今昔物語集』を見た表2によると、すべての語に対応語があるが、4番目の「一寺」には、「一/の/寺」3語が対応している。また、『今昔物語集』から『宇治拾遺物語』を見た表3によると、1番めの「今」、7番目以降の「と」「申す」「聖人」「在ます」には、対応語がない。また、5番目の「陀楼摩」の対応語は「達磨」で表記が異なっているが、同語の「だるま」と認定する。さらに、表2と表3の範囲にはないが、対応語があっても、別の語に対応することもあり、例えば、表1の『宇治拾遺物語』の3番目の文の3つめの語「この」は、『今昔物語集』では4つめ

¹ 『宇治拾遺物語』のテキストは『新編日本古典文学全集』（小学館）による。『今昔物語集』のテキストは、巻1～巻10は『日本古典文学大系（旧版）』（岩波書店）、巻11～31は『新編日本古典文学全集』による。『新編日本古典文学全集』のテキストは、小学館から国立国語研究所に提供されたものを用い、『日本古典文学大系（旧版）』のテキストは、国文学研究資料館の「日本古典文学本文データベース」のものを利用した。なお、『今昔物語集』のテキストは漢字片仮名交じり文であるが、片仮名を平仮名に変換してデータ化を行った。

の文の冒頭の語「其の」に対応している。

このように、文レベル、語レベルの対応のありようは複雑であり、パラレルコーパスを作る際は、何と何を対応付けるのかについて、認定にゆれが生じないような詳しい基準を作成しておく必要がある²。

表1 『宇治拾遺物語』121と『今昔物語集』巻4-9の文の対応

文 id	宇治拾遺物語	今昔対応文	文 id	今昔物語集	宇治対応文
u001	昔、天竺に一寺あり。	k001-003	k001	今（は）昔、天竺に、陀楼摩和尚と申す聖人在ます。	u001-003
			k002	此の人、五天竺に不行至ぬ所無く行て、諸の比丘の所行を善く見て世に傳へ給ふ人也。	u#
			k003	一の寺有り。	u001
u002	住僧もつとも多し。	k004	k004	其の寺に入て比丘の有様共を伺ひ見る、寺に比久共多く住む。	u002-003
u003	達磨和尚この寺に入て、僧どもの行ひをかゞひ見給ふに、ある坊には念仏し、経を讀み、さまざまに行ふ。	k001-005	k005	或る房には佛に花香を奉り或る房には經典を讀誦する比丘有あり、様々に貴く行ふ事無し。	u003
u004	ある坊を見給ふに、八九十ばかりなる老僧の、ただ二人みて圍碁を打つ。	k006-007	k006	但し其の中に一の房有り、人住たる氣色無し、草深塵積れり。	u004
			k007	深く入て見れば、八十許なる老比久に人居て碁を打つ。	u004

表2 『宇治』から『今昔』への語の対応

文 id	語 id	宇治	今昔	対応文	対応語	分類
u001	001	昔	昔	k001	002	①同語
u001	002	天竺	天竺	k001	003	①同語
u001	003	に	に	k001	004	①同語
u001	004	一寺	一の寺	k003	001-003	②別語
u001	005	あり	有り	k003	004	①同語

表3 『今昔』から『宇治』への語の対応

文 id	語 id	今昔	宇治	対応文	対応語	分類
k001	001	今	ϕ	u001	#	③非対応
k001	002	昔	昔	u001	001	①同語
k001	003	天竺	天竺	u001	002	①同語
k001	004	に	に	u001	003	①同語
k001	005	陀楼摩	達磨	u003	001	①同語
k001	006	和尚	和尚	u003	002	①同語
k001	007	と	ϕ	u003	#	③非対応
k001	008	申す	ϕ	u003	#	③非対応
k001	009	聖人	ϕ	u003	#	③非対応
k001	010	在ます	ϕ	u003	#	③非対応

このような対応付けの作業については、基準を整備した上で進めていく必要があるが、その基準を策定しつつ探索的な試行作業を、次の5対の同文説話に対して実施した。デー

² 個々のテキストにおける単語認定は、小木曾（2012）などが示す、中古和文の短単位認定基準に従う。これとは別に、二つのテキストを対応付ける基準の策定が必要である。

分量は、和文説話集が延べ語数で約 5500 語、『今昔物語集』が約 6700 語である。その思考結果の概要は 5 節で報告する。

宇治 31／今昔巻 23-21、宇治 91／今昔巻 5-1、宇治 102／今昔巻 14-29、宇治 137／今昔巻 4-9、宇治 187／今昔巻 31-11

4. 漢文説話集と『今昔物語集』の同文説話のパラレルコーパス

4.1 漢文説話集と『今昔物語集』のテキスト

『今昔物語集』との同文説話を収録する漢文系の説話集は多様で、直接的な関係があるものと間接的な関係にとどまるものがあり、その識別は難しい場合も多い。直接関係がない『宇治拾遺物語』と『今昔物語集』をパラレルコーパスにしたように、同文性の高い同文説話を持つ漢文説話集も、パラレルコーパス作成の対象としてよいだろう。ここでは、『日本霊異記』中巻 32 話と『今昔物語集』巻 20-22 を例に取り上げたい。この二書の関係については、『今昔物語集』が『日本霊異記』（平安時代初期、9 世紀前半）を直接の典拠として翻訳したとされている。上記のペアの各冒頭部を掲げよう³。

日本霊異記 中巻 32

聖武天皇世、紀伊國名草郡三上村人、為薬王寺、率引知識、息晋薬分。其薬料物、寄乎岡田村主姑女之家、作酒息利。時有斑犢。入薬王寺、常伏塔基。

今昔物語集 巻 20-22

今昔、紀伊國の名草の郡三上の村に一の寺を造て、名を薬王寺と云ふ。其後、知識を引て、諸の薬を儲て、其の寺に宜て、普く人に施しけり。而る間だ、聖武天皇の御代に、其の薬の料物を、岡田の村主と云者の姑の家に宿し置く。而るに、其の家の主其の物を酒に造て、其を人に与へて、員を増して得むと為るに、其の時に、斑なる小牛出来て、薬王寺の内に入、常に塔の本に臥す。

4.2 文と語の対照

3 節で和文説話集との同文説話の対応付けを行ったのと同様の方式で、文レベルの対応と語レベルの対応を示すと、表 4、表 5、表 6 のようになる。漢文説話集を扱う際には、和文説話集の場合にはなかった問題が二点あり、その処理方法をあらかじめ決めておく必要がある。

第一点は、原文そのままの漢文テキストを扱うのではなく、訓読文テキストを扱うという点である。平安・鎌倉時代の日本における漢文は、純粹漢文は訓読されることも多く、和化漢文は日本語を表記している部分が多く、特に『今昔物語集』の説話と対応付ける際は、漢文としてではなく日本語文として扱うべきだと考えられる。表 4～6 の『日本霊異記』のテキストは、『新編日本古典文学全集』の訓読文によったものである。訓読する際に、原文にない文字を読み添えたことによって生じた語は、括弧で括った⁴。括弧で括った原文にない語については、集計や分析の対象から外すことが必要であろう。

第二点は、語の同定の問題である。和文や和漢混淆文の場合は、語の同定は比較的容易で、どこまでを一語と認めるのか、またどう読むのかについて、迷うものは多くない。これに対して漢文は、単位や読みの同定について複数の可能性が想定できるものが多い。『今昔物語集』との対応付けということを考える場合、複数の可能性がある場合は『今昔物語

³ 『日本霊異記』のテキストは、『新編日本古典文学全集』（小学館）による。

⁴ 活用語尾など語の一部を読み添えるものについては括弧などで括ることはしなかった。

集』の表現に近いものを探るという規則を立てるのが現実的だろう。『日本霊異記』の場合は、原則として『新編日本古典文学全集』の訓読文に従い、『今昔物語集』の表現により近い認定が可能なものについては、これを修正していくことにしたい。

表4 『日本霊異記』中巻32と『今昔物語集』巻20-22の文の対応

文 id	霊異記	今昔対応	文 id	今昔	霊異記対応
r001	聖武天皇(の)(み)世(に)、紀伊國名草郡三上(の)村(の)人、薬王寺(の)為(に)、	k001,k003	k001	今(は)昔、紀伊(の)国の名草の郡三上の村に一の寺を造て、名を薬王寺と云ふ。	r001
r002	知識(を)率引(して)、晋(く)薬分(を)息し(き)。	k002	k002	其後、知識を引て、諸の薬を儲て、其の寺に宜て、普く人に施しけり。	r002
r003	其(の)薬料(の)物(を)、岡田村主(の)姑女之家(に)寄せ乎、	k003	k003	而る間だ、聖武天皇の御代に、其の薬の料物を、岡田の村主と云者の姑の家に宿し置く。	r001,r003
r004	酒(を)作り利(を)息し(き)。	k004	k004	而るに、其の家の主其の物を酒に造て、其を人に与へて、員を増して得むと為るに、其の時に、斑なる小牛出来て、薬王寺の内に入て、常に塔の本に臥す。	r004-006
r005	時(に)斑(なる)慣有り(き)。	k004			
r006	薬王寺(に)入り、常(に)塔(の)基(に)伏せ(り)。	k004			

表5 『霊異記』から『今昔』への語の対応

文 id	語 id	霊異記	今昔	対応文	対応語	分類
r002	001	知識	知識	k002	003	①同語
r002	002	(を)	を	k002	004	—
r002	003	率引	引	k002	005	②別語
r002	004	(し)	#	k002	#	—
r002	005	(て)	て	k002	006	—
r002	006	晋(く)	普く	k002	020	①同語
r002	007	薬分	薬	k002	009	②別語
r002	008	(を)	を	k002	010	—
r002	009	息し	施し	k002	023	—
r002	010	(き)	けり	k002	024	—

表6 『今昔』から『霊異記』への語の対応

文 id	語 id	今昔	霊異記	対応文	対応語	分類
k002	001	其	ϕ	r002	#	③非対応
k002	002	後	ϕ	r002	#	③非対応
k002	003	知識	知識	r002	001	①同語
k002	004	を	(を)	r002	002	—
k002	005	引	率引	r002	003	②別語
k002	006	て	(て)	r002	005	—
k002	007	諸	ϕ	r002	#	③非対応
k002	008	の	ϕ	r002	#	③非対応
k002	009	薬	薬分	r002	007	②別語
k002	010	を	(を)	r002	008	—
k002	013	儲	ϕ	r002	#	③非対応
k002	014	て	ϕ	r002	#	③非対応
k002	015	其の	ϕ	r002	#	③非対応
k002	016	寺	ϕ	r002	#	③非対応
k002	017	に	ϕ	r002	#	③非対応
k002	018	宜	ϕ	r002	#	③非対応

(以下略)

このように漢文説話集の場合は、和文説話集の場合以上に詳細な基準が必要になるが、その基準を作成しながら、上記のような対応付けを次の共通説話の10対について試行した。分量は漢文説話が延べ約2000語、『今昔物語集』が約4000語である。

法苑珠林卷37 敬塔篇35 施繞部5／今昔卷1-36、法苑珠林卷37 敬塔篇35 感福部5／今昔卷2-11、三宝感応要略中21／今昔卷6-39、法華験記中49／今昔卷12-40、法華験記上18／今昔卷13-02、法華験記下89／今昔卷14-15、法華験記下111／今昔卷15-44、日本靈異記上5／今昔卷11-23、日本靈異記中32／今昔卷20-22、日本往生極樂記25／今昔卷15-18

5. 対照結果の分類と分析例

5.1 対照結果の分類

3節、4節で説明したような方法で、『今昔物語集』以外の説話集（説話集A）と『今昔物語集』（説話集B）の共通説話について対照を行ったデータは、次のように分類できる⁵。

説話集A（『今昔物語集』以外）の語

- | | | |
|--------|-----------|----------|
| ① 同語対応 | 例：昔（宇治） | [昔（今昔）] |
| ② 別語対応 | 例：率引（靈異記） | [引く（今昔）] |
| ③ 非対応 | 例：為（靈異記） | [ぢ（今昔）] |

説話集B（『今昔物語集』）の語

- | | | |
|--------|----------|-----------|
| ① 同語対応 | 例：昔（今昔） | [昔（宇治）] |
| ② 別語対応 | 例：引く（今昔） | [率引（靈異記）] |
| ③ 非対応 | 例：今（今昔） | [ぢ（宇治）] |

表2、表3、表5、表6の事例にはこの分類も書き込んだ。このうち、①同語対応は、文体が異なる説話集で同一の語が使われるものであるもので、文体的変異のない語ということになる。例えば、和文説話集から『今昔物語集』を見たとき、「足」「知る」「打つ」などはほとんどすべての箇所ですべての箇所で同じ語が対応しており、漢文説話集から『今昔物語集』を見ると、「寺」「見る」「聞く」などがほぼ全例同じ語が対応している。

一方、②別語対応は、別語が選ばれた原因は、文体が異なることにある可能性が高く、②に分類されることが多い語は、文体的変異を研究する際に、特に注目すべき語群であると考えられる。そして、③非対応は、一方の説話集で書かれ他方の説話集で書かれない理由が、文体とは別の要因（説話集の編纂目的、編者の思想など）である場合も多いと思われるが、文体が関与している可能性もあり、②に次いで注目していく必要があると思われる。

5.2 和文説話集との対照結果の分析

上記の分類結果のデータの集計と分析を進めているが、その中間報告として文体的変異の観点から特徴的だと考えられるいくつかの語について、紹介したい。まず、説話集Aが和文説話集の場合の対照結果の方から取り上げたい。

説話集A（『今昔物語集』以外）の側で、②別語対応が特に多いものに、「給ぶ」「むず」「で」「囲碁」「築地」「此かる」などがある。表7は、これらの分類別の件数を示したもののだが、「此かる」を除く5語は、『今昔物語集』の同文説話では、ほぼ決まった語（下線の

⁵ このような分類は、山元・田中・近藤（2012）でも示した。本稿のA①・B①は、そのときの2.2、A②は2.1、A③は1.0、B②は2.3、B③は3.0に、それぞれ相当する。

語) が対応しており、それぞれ、文体的な対語関係にあるものと考えられる。

表7 説話集Aにおいて②別語対応が多い語の例

語	①同語	②別語	③非対応	②の『今昔物語集』での対応語
給(た)ぶ	0	5	0	給ふ4、奉る1
むず	1	4	0	むとす3、なり[推定]1
で	1	3	1	ずして3
囲碁	0	5	0	碁5
築地	0	5	0	築垣4、城1
此かる	1	5	1	此く1、此れ1、然る1、己等が様なる1、夜叉の一党1*

*は、語単位の対応でなく、複数の語に対応するもの

文体的対語と考えられるものについて、平安時代後期(11世紀初め)までの和文作品を対象とした『日本語歴史コーパス 平安時代編』(国立国語研究所)⁶を使って頻度調査を行うと、次のように、いずれの対においても、頻度は一方の語に極端に偏っており、平安時代において文体的な特異性を持つ語であったことが裏付けられる。

- (1) 給ぶ(21) / 給ふ(17868) (2) むず(21) / むとす(218)
 (3) で(1079) / ずして(31) (4) 囲碁(0) / 碁(29)
 (5) 築地(9) / 築垣(0)

(1)(2)(4)の3対は、平安和文作品では、『今昔物語集』に特徴的な語の方が、頻度が圧倒的に多くなっている。一方、(3)(5)の2対は、和文説話集に特徴的な語の方が、頻度が圧倒的に多くなっている。このような現象は、文体的な特異性の内実が、二つの群で異なっていることを考えさせられ、研究を深めていく必要性が強く感じられるところである。

一方、決まった語が対応していない「此かる」のように、対語をもたない文体的な特徴語が存在していることも判明するが、こうした語をどのように位置付けるべきかについても研究していかなければならない。

説話集B(『今昔物語集』)の側で②別語対応が多いものには、「間」「碁」「比丘」「古老」「暫く」「美麗」「王宮」などが指摘できる。このうち「碁」は、A②に多い「囲碁」の対応語になっていたものであるが、それ以外はA②に多い語とは一致しない。それらをまとめた表8によれば、和文説話集の同文説話で特定の語(下線の語)が対応する場合もあれば、多様な語が対応する場合もある。これらの語についても、当時の他の文献での出現状況を参照しながら、文体的変異の内実について研究することが期待されよう。

次に、③非対応が特に多い語がどのようなものか見ていこう。説話集A(『今昔物語集』以外)の側で③非対応になるものをあげると、「此処」「度」「いみじ」「付ける」「候ふ」「え(副詞)」「やがて」「かな(終助詞)」「など(副助詞)」などがある。これらの現象が、文体を理由として特徴語になっているものなのか、別の理由によるものなのかについては、個々の語の事情について研究していく必要がある。同じようにして、説話集B(『今昔物語集』)の側で③非対応が多いものに注目すると、「各々」「先」「一つ」「他」「更に」「忽ち」「未だ」「相」など、多くの語がリストアップされる。これらについても、このような特徴

⁶ <https://maro.ninjal.ac.jp/search>

が生じる背景や事情を検討していくことが求められるだろう。

表8 説話集Bにおいて②別語対応が多い語の例

語	①同語	②別語	③非対応	②の和文説話集での対応語
間	2	5	2	<u>ほど</u> 3、が1、に1
碁	0	6	3	<u>囲碁</u> 5、この事1
比丘	0	6	6	<u>僧</u> 3、住僧1、寺僧1、他僧1
暫く	1	3	1	<u>暫し</u> 3
美麗	0	6	1	をかしげ2、めでたし1、美し1、あはれげ1、玉1
王宮	0	3	1	内裏1、御内1、公卿殿上人*1

*は語単位の対応でなく、複数の語に対応するもの

5.3 漢文説話集との対照結果の分析

それでは、説話集A（『今昔物語集』以外）が漢文説話集である場合はどうであろうか。漢文説話集の場合、3節で述べたような難しい問題がつかまとうため、データの集計と分類が不十分な段階であるが、②別語対応が特に多いものとしては、「詔る」「沙門」「比丘」「故」などが挙げられる。これらのうちはじめの3語は、表9に見るように、『今昔物語集』の同文説話では、ほぼ決まった語（下線の語）が対応しており、それぞれ、文体的な対語関係にあるものと考えられる。一方、「故」は文体的対語はもたない文体的特徴語と見ることができよう。

表9 説話集Aにおいて②別語対応が多い語の例（漢文説話集）

語	①同語	②別語	③非対応	②の対応語
詔る	0	4	1	<u>仰す</u> 4
沙門	1	5	1	<u>僧</u> 3、持経者1、海蓮1
比丘	2	6	1	<u>僧</u> 5、汝1
故	1	3	1	が為に1、依て1、て1

説話集B（『今昔物語集』）の側で②別語対応が多いものに、「后」「僧」「申す」「成る」などが指摘できる。このうち「僧」は、A②に多い「沙門」「比丘」の対応語になっていたものであるが、それ以外はA②に多い語とは一致しない。それは、表10のように、和文説話集の同文説話では、特定の語やある類の語が対応する場合もあれば、多様な語に対応する場合もある。

表10 説話集Bにおいて②別語対応が多い語の例（漢文説話集）

語	①同語	②別語	③非対応	②の対応語
后	0	4	1	<u>皇后</u> 4
僧	6	9	7	<u>比丘</u> 5、 <u>沙門</u> 3、我1
申す	1	4	1	<u>奏す</u> 3、願ふ1
成る	0	4	4	生む1、得1、作す1、所役1

最後に、③非対応が多いものはどういう語だろうか。まず説話集A（『今昔物語集』以外）

の側では、文末の「矣」や副詞「亦」が非常に多いが、これらは、漢文説話に使われていても、『今昔物語集』では排除されるタイプの語であったと考えられる。ほかに、「其れ」「已に」「更に」などが同様のタイプとしてあがってくる。

説話集B（『今昔物語集』）の側では、「たり」「き」「は」「を」などの助詞・助動詞が多いが、これは、そもそも漢文にはない語である。自立語にも、「間^{あひだ}」「給ふ」「伝ふ」など、漢文にはなく『今昔物語集』が独自に使う語は多い。こうした語の性質についても、まずは一語一語について研究し、文体的特徴を持つ事情を究明していくことが望まれよう。

6. おわりに

『今昔物語集』の同文説話を材料にして、平安時代末期の文体的変異を解明しようとする研究は、2節にあげたように従来から盛んであったが、そこに関連説話集とのパラレルコーパスを持ち込むことで、その方面の研究をいっそう活発化させ見通しのよいものにしていく効果が期待できる。それが実現すれば、平安・鎌倉時代における文体的変異に関して、従来は十分に目の行き届いていなかった、より広い範囲の研究につなげていくことができると思われる。そのような研究は、パラレルコーパスの対象にならない、この時代の多くのテキストのコーパス化に対しても有益な知見をもたらすことになると思う。

付記

本研究は、国立国語研究所共同研究プロジェクト「通時コーパスの設計」（プロジェクトリーダー：近藤泰弘）、及び、日本学術振興会科学研究費基盤研究（B）「和漢の両系統を統合する平安・鎌倉時代語コーパス構築のための語彙論的研究」（24320086、研究代表者：田中牧郎）による成果の一部です。

文献

- 小木曾智信（2012）『和文系資料を対象とした形態素解析辞書の開発 研究成果報告書』（科研費報告書、http://dl.dropbox.com/u/73297026/report/unidic-EMJ_report2012.pdf）
- 小峯和明（1997）『今昔物語集の形成と構造 補訂版』笠間書院
- 近藤泰弘（2012）「日本語通時コーパスの設計について」（『国立国語研究所プロジェクトレビュー』国立国語研究所、3-2、pp.84-92）
- 今野真二（2009）『文献日本語学』港の人
- 佐藤武義（1984）『今昔物語集の語彙と語法』明治書院
- 築島裕（1963）『平安時代の漢文訓読語につきての研究』東京大学出版会
- 藤井俊博（2003）『今昔物語集の表現形成』和泉書院
- 船城俊太郎（2011）『院政時代文章様式論考』勉誠出版
- 峰岸明（1986）『平安時代古記録の国語学的研究』東京大学出版会
- 山口仲美（1984）『平安文学の文体の研究』明治書院
- 山元啓史・田中牧郎・近藤泰弘（2012）「通時コーパスと言語空間論」（『第1回コーパス日本語学ワークショップ 予稿集』国立国語研究所 言語資源研究系・コーパス開発センター、pp.241-248）